

舞鶴市糸井文庫蔵『古手妻品玉手筥』

に見える浦島伝説享受と

人魚の吸物と蒸し物 付、翻刻

畑 恵里子

一 はじめに

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『古手妻品玉手筥（ふるてづましなだまてばこ）』を対象として、浦島伝説の享受史における本作品の特徴をごく簡易に整理したものである。本書の現在の所有者は舞鶴市、データベースは立命館大学アート・リサーチセンター（以下、ARCと表記する）による。

本書は浦島伝説の二次創作に相当すると思われる。地上で暮らす浦島夫婦に焦点が向けられている。筋立てはおおよそ以下のとおりである。

龍宮から地上に戻った浦島はその容貌を賛美されていたが、玉手箱を開封して老齡となってしまうため、地上に住む亀右衛門に相談し、龍宮の乙姫を再訪して縋る。すると、人魚の肉を用いた吸物と二つ目の玉手箱とが与えられた。吸物によって浦島は壮年となった。しかし、地上では数十年の時間が経過していたため、浦島の妻は老齡となってしまふ。夫婦としての釣合が取れなくなってしまったことから、妻は夫の浦島を恨んだ。浦島の妻はひそかに人魚の肉を大量に食したところ、若返りすぎてしまい、幼女となってしまふ。浦島も同様にひそかに人魚の肉を食したところ、食べすぎてしまい、幼年となってしまふ。

二 書誌情報

舞鶴市糸井文庫について簡易に触れておく。

本文庫は一九四九年より舞鶴市指定文化財とされている。糸井文庫には、京都府北部を舞台としている大江山・浦島・山椒（山庄）大夫などに関する、近世から明治期の資料が、集中的におさめられている。舞鶴市糸井文庫の目録にあたる『丹後郷土資料館目録』では、『古手妻品玉手筥』を黄表紙のカテゴリに位置づけていて、作者は桜川慈悲成（さくらがわ・じひなり）、作画は歌川豊国、寛政七年板行と整理している（注一）。二〇二四年現在、糸井文庫は舞鶴市の管轄下にあるが、本来の所有者は糸井仙之助であり、本目録の作成者も同氏である（一八七四～一九四九年）。京都府与謝郡出身の実業家で、故郷である丹後にゆかりの古典籍を蒐集した。後に本文庫を舞鶴市が管理するようになったという（注二）。

ARCのデータベースである「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」では、

本書を黄表紙・合巻とする（注三）。草双紙の一つである黄表紙とは、文字通り黄色い表紙を持ち、一七七五（安永四）年から一八〇六（文化三）年頃を中心に隆盛した、しゃれや風刺に特徴を持つ大人向けの絵入りの本である。書名の読み方は「ふるてつましなまてはこ」としている。ARCでは、作は桜川慈悲成、画は歌川豊国、判型は中本（二七・三×二一・四センチ）、巻冊は二冊、刊行年は寛政七（一七九五）年、制作は西村屋与八としている。本データベースの書誌情報では、さらに次のように説明している（注四）。

浦島太郎の亀にのる図が確認される。上巻のみ元題箋あり、下巻十丁ウに新版目録あり。

備考には「2冊で1セット 軋破れ」ともある。

日本国語大辞典では、作者の桜川慈悲成について次のように説明している。

江戸後期の戯作者、落語家。通称鰯屋大五郎（かざりやだいごろう）。戯作者桜川杜芳（とほう）門下。江戸芝宇田川町に住み、多芸多才の江戸っ子。黄表紙、滑稽本、咄本（はなしぼん）などに筆をとり、滑稽を中心とした作風に見るべきところがある。黄表紙「馬鹿長命子気物語」、咄本「滑稽好（こっけいこう）」などがその代表作。宝暦一二（天保四年（一七六二）一八三三）

本作品の後半には、作者が顔を出している場面があるのだが、挿絵を見ると、「大」の文字をあしらった着物を着ている様子がうかがえる（下巻5丁表）。鰯屋大五郎という通称に由来すると考えられる。

三 揺れ動く浦島夫婦の年齢

冒頭では、浦島の若々しい容姿が評判となっている。

かやうに候ものは、昔昔、龍宮へ参り、玉手箱を乙姫様に貰ひ候浦島太郎にて候。誠に不思議なる玉手箱にて、この浦島太郎、誰人に会ふても、そちは若ひ若ひと褒めらるること年久しうござる。あまりに不思議はれぬことでござれば、そと玉手箱を開けてみやうと存ずる。（上巻1丁表）

浦島が獲得したのは「誠に不思議なる玉手箱」であったという。それは、誰に会っても浦島の年若い容姿が称賛の対象となったためである。浦島は「年久しく不思議に思」（上巻1丁裏）い、いつ開封しようかと逡巡するが、「かみ様」つまり妻には止められていた。「かみ様は確かに化物でもでること心得、乙姫さんが開けるなど、かたがた言いなんした箱を開けなんすなと異見をする」（上巻1丁裏）とある。古代の浦島伝説では、浦島と乙姫とは結婚するという筋立てであるのだが、このように、本作品では、「乙姫さん」と「かみ様」とは別の存在であることがうかがえる。また、この言葉により、玉手箱はまだ開封されていないことも示唆されている。

その後、妻の留守に浦島は玉手箱を開封した。すると、「とふのも（唐の芋）のふかしたてといふ湯気がぱっとた」ち、瞬時に「寿老人のやう」な「老人」になってしまった。ここには古代からの「開けて悔しき」（上巻2丁表）という言葉が附随しており、開封と老齡への悔恨が示されているのだが、それ以上に、「寿老人」に擬せられて

いる点に留意しておきたい。浦島の老齡を悲嘆のみととらえずに縁起物とも見なすという、近世特有の浦島享受があらわれているからである。なお、中世の浦島伝説の末尾では、浦島と乙姫との二人は鶴と亀との組み合わせの縁起物となっているのだが、近世では七福神などに擬される場合も生じるようになる（注五）。

ここで「万年橋に世帯を持ち、不足なく暮らしている」という亀右衛門が登場する。背に乗せて龍宮へ連れて行くので乙姫へ縋るようにと助言する（上巻2丁裏～3丁表）。

龍宮の乙姫は、浦島へ再来の理由を尋ねる（上巻3丁裏）。浦島は「開けるなと仰せありし玉手箱を開けたるあやまり、段々御託びごと申し、何とぞ今一度若くなしてたび給へ」（上巻3丁裏）と願いを述べる。その結果、浦島は「人魚の御吸物にて御酒を下され、その上、また玉手箱を取らせ給ふ」との乙姫のはからいを得た（上巻4丁表）。つまり、浦島は「人魚の御吸物」と二度目の「玉手箱」とを得たことになる。

その後、地上に戻った浦島は、「人魚の御吸物を頂戴しなければ、たちまち二十四、五の色男にな」った（上巻4丁裏）。しかし、龍宮で過ごした「ちっとの間」と思われた時間は、「はや五十年」以上に相当していたため、「かみ様の頭は雪のやふになり、昔の景色はちっともなく、腰はへの字に、齒は一本もな」い老女のありさまとなってしまう（上巻4丁裏）。

「釣竿のつりやわぬ（釣り合わせぬ）こと」と立腹した浦島の妻は、「わしが婆あになれば、貴様、爺いになってくれてこそ嬉しひのに、をればっかりばばうり（瓜）して」「爺いになるか、それとも俺を若

くするか、二つに一つの返答聞こふ」（上巻5丁裏）と、浦島へ迫る。このように、本作品は、浦島伝説の登場人物を基軸としながらも、古代の浦島伝説とは異なる側面も多い。その中で注目されるものを列記する。

（1）古代では、夫婦であった浦島と乙姫とは、本作品では夫婦とはなっていない。

（2）古代では、亀と乙姫とは同一であったが、本作品では亀と乙姫とは別個の存在となっている。

（3）古代では、故郷の消失などの失意から玉手箱を開封するが、本作品では不老を賛美されることから不思議に思い開封している。

（4）古代では、老人となった浦島は悔恨や愚かしさが指摘されるが、同時に、本作品では七福神のうち「寿老人」という長寿の存在にも擬せられている。

（5）本作品では、若さを取り戻そうとする浦島は、乙姫の助力を得て、人魚の御吸物、御酒、そして二度目の玉手箱を得る。人魚の吸物を飲んだ浦島は壮年の色男となる。

（6）本作品では、浦島に妻がいて、妻は老齡となってしまう。

このうち特に留意しておきたいのは、先に触れた（4）の他に、（5）となる。なぜなら、近世の浦島享受はしばしば他伝説との融合を伴う場合があるためである。

人魚については、近世期に成立した寺島良安による百科事典の『和漢三才図絵』が参考となる。巻第四九「魚類」には次のようにある（注六）。

人魚（ジンイユイ） 鯨魚

『和名抄』（鱗介部、竜魚類）に、『兼名苑』を引いて、人魚（一名は鯨魚）とは魚身人面のものである、とある。

『本草綱目』（鱗部、無鱗魚類、鯨魚）には『稽神録』を引いて次のようにいう。謝仲玉という人があった。婦人が水中に出没するのを見たが、腰から下はすっかり魚であった。また查（奉）道という人があった。高麗に使者として行き、海沙中に一人の婦人を見たが、肘の後に紅い鬚があった。この二物はともに人魚である、と。（中略）漁夫は網に入っても気味が悪いので捕えない。

阿蘭陀では人魚の骨「倍以之牟礼（ヘイイシノレ）」を解毒薬としているが、すばらしい効目がある。（後略）

また、「推古帝の二十七年（六一九）、摂津の堀江」での『日本紀』の時分から目撃されており、「いまでも西海の大洋の中」で見られるという。「いまでも」というのは『和漢三才図絵』成立当時の近世期という意味であろう。そして「阿蘭陀」では、「人魚の骨」が薬効高い「解毒薬」として用いられているという。本作品の場合、老齢となった浦島を若返らせるために人魚の吸物が登場しているのだから、「解毒薬」そのものではないのだが、人魚の肉は「すばらしい効目」には違いない。とはいえ、「漁夫は網に入っても気味が悪いので捕えない」ともあるのだから、その肉が食べられたとは記されていない。

とはいえ、人魚の肉を食べて不老不死を得たという話はしばしば見られる。日本海沿岸に伝わる八百比丘尼（注七）が著名である。人魚については、日本の『和名類聚鈔』や『吾妻鏡』、あるいは中国の古典『山海経』など、田辺悟が網羅的にまとめている（注八）。時代が

下り、近世期の井原西鶴の『西鶴織留』や滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』（注九）、近世から明治期にかけての河竹黙阿弥による『浪底親睦會』（注一〇）などにも見られることから、本作品の成立時には膾炙していた内容と想定できる。八百比丘尼について、宮田登は「禁断の霊肉である人魚の肉あるいは九穴の貝（アワビ）を食べたためと伝えられ、たいいてい異人饗応譚が伴っている」と興味深い指摘をしている（注一一）。地上と龍宮とを往還する浦島もまた、龍宮の側からすれば、ある種の異人的存在となるのではあるまいか。

ここでは、本作品が浦島伝説と人魚伝説との融合によって浦島享受の一端をあらわしていることを確認しておきたい。

四 玉手箱の煙／湯気を用いた人魚の蒸し物

浦島の妻は「浦島が持って来た人魚を探し出して、こそこそと若くなって見せつけやう」と「手料理」にする（下巻一丁表）。浦島に内緒で人魚の肉を食べる妻は、「初めて食ってみるが、これはとんだ旨ひ物だ。何杯も食へる。おもいれ食って若くなりましょう。」と歓喜した（下巻一丁表）。

すると、「不思議な事もあるもの、かみ様は人魚をしたたか食うて、二、三日経つと、十一、二の生娘となりしかば、とんだ可愛いらしくなつて」しまう（下巻一丁裏）。そのため、「こいつは乙だと、浦島いろいろ痴話れども、なかなか色気も何にもなく、雛様事や何かばかり」に夢中であり、妻は、外面だけではなく、内面もすっかり子供に戻ってしまっていた（下巻一丁裏）。浦島は妻へ、「俺はこの位

な中男だに、貴様そんなあたけなひ娘になっていいか」と不満を述べるものの、妻は「放しなよ、お隣へ行ってままごとをするはな」と返答するありさまであり、両者はかみ合わない（下巻2丁表）。

そこで浦島は、「こそこそと人魚を取り出し、煮て食」べた。すると、「今度は食ひ過ぎたと見へて、浦島、やふやふ五つ、六つの子供にな」ってしまう（下巻2丁裏）。

このありさまに、「かみ様が十三で亭主が七つ、呆れて物が言われねえ」（下巻2丁裏）との文言が挿入され、続く下巻3丁裏～4丁表では「子供遊芝居道行」^{こどもあそびしばいみちゆき}がえがかれる。どうやら囃子であるようだが、文意をとることはむずかしい。

こうした中、亀右衛門は「浦島夫婦」を「丁度年頃いい夫婦にしたく」^{（下巻4丁裏）}。その場には本作品の作者も登場する。検討の結果、「浦島夫婦を大晦日に早く寝かして年を寄せ、元日、鶏のなかめ内起こして若くし、その上、残りの人魚を玉手箱の湯気で蒸して食わせてみたら、中位な年恰好になりそうなもの」（下巻4丁裏～5丁表）と、本作品の作者が助言する。

それに従い、試みると、「年も寄らず、そういつて子供にもならず、浦島夫婦、丁度良ひ釣合に、浦島二十五、六、かみ様二十二、三、花盛の夫婦仲、めでたひ春をそりゃ迎へけり迎へけり」（下巻5丁裏）となった。こうして大団円へと至る。

さて、興味深い点が二つある。

一つ目は「人魚」の肉の登場とその料理法である。

本作品において、玉手箱から立ち上るのは「湯気」となっている。

しかし、古代から中世では、玉手箱の中身は「白雲」（注一一）、「紫

雲」（注一二）、「紫煙」（注一四）、「紫雲」（注一五）、「煙」（注一六）などである。このように、通常は白や紫でいろどられている玉手箱の煙あるいは雲が、「湯気」に置換されている点が特徴のひとつとなる。

「湯気」ということは、玉手箱の中身について、「紫」ではなく「白」を基調とした浦島伝説が、近世期には享受されていたということを示していよう。とはいえ、舞鶴市糸井文庫には『水江浦島 対紫雲篋』という作品もおさめられているのだから、当時、「紫雲」が必ずしもマイナーであったというわけでもなさそうではある。だが、「白」でなければ「湯気」で人魚の「蒸し物」を作るという展開に至ることはむずかしいことから、本稿では「白雲」の影響力を重視しておきたい。

このように、本作品は、浦島享受を基軸としつつも、それにとどまらず、不老不死の人魚伝説と融合している点が特徴のひとつとなる。人魚伝説は、加齢の側面において、浦島伝説とはいわば対照的な作品となる。そして、対立しながらも、両者とも海にまつわる伝説という共通項をも持つ。

二つ目は、浦島享受における祝祭の色彩である。

先に触れた七福神のひとりである「寿老人」との文言の他、末尾にも留意しておきたい。老齢に至る代物という点は古代の伝説と変わらないのだが、悲嘆に暮れる浦島の姿とは対照的に、「花盛の夫婦仲、めでたひ春をそりゃ迎へけり迎へけり」（下巻5丁裏）とあり、祝意で閉じられているからである。このように、近世期の浦島伝説には寿ぎの色合いがついてまわる印象が強い。

五 おわりに

近世期に伝わる本作品の浦島伝説享受には二つの特徴が見られる。

一つ目は、他の伝説や伝承等との融合である。様々なヴァリエーションを展開しながら享受される浦島伝説であるのだが、本作品では人魚伝説と明快に結びつく。浦島伝説も人魚伝説も海洋を舞台としており、老齡あるいは不老不死といった、人間の寿命を操る内容となる。

二つ目は、祝賀の系譜である。浦島が老齡となったことが「寿老人」に擬せられており、老齡は必ずしも失意に結びつくとは限らない。また、妙齡となった浦島夫婦は、作品末尾にて「めでたひ春」とことほがれている。

以上、古代の浦島伝説からの変容を簡易に指摘した。

(注一) 糸井仙之助編『丹後郷土資料目録(改訂版)』(舞鶴市教育委員会、一九五七年初版)。

(注二) 舞鶴市職員(二〇一七年当時)からの聞き取りによる。

(注三) 立命館大学アート・リサーチセンター「糸井文庫閲覧システム」(https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php)

二〇二四年一月一〇日閲覧)。

(注四) 立命館大学アート・リサーチセンター(注三) データベース。

(注五) 拙稿「舞鶴市糸井文庫蔵『風流新版竜宮曾我物語』から見える寿ぎの文学としての浦島伝説」(『日本文藝学』、二〇二〇年三月)。

(注六) 寺島良安『和漢三才図絵』(東洋文庫、第四七一巻、平凡社、

一九八七年)。

(注七) 『日本国語大辞典』(小学館)。

(注八) 田辺悟『ものと人間の文化史 一四三 人魚』(法政大学出版局、二〇〇八年)。

(注九) 宮田登は「白比丘尼伝説」とも呼ばれる「八百比丘尼伝説」についての論考において、『南総里見八犬伝』に載せられた「人魚」の絵を挙げている。宮田登『怖さはどこからくるのか』(ちくまプリマー・ブックス、一九九一年)。後に、宮田登『はじめての民俗学―怖さはどこからくるのか―』(ちくま学芸文庫、二〇一二年)。

(注一〇) 『河竹黙阿弥集』(明治文学全集 第九巻、筑摩書房、一九六六年)。

(注一一) 『改訂新版 世界大百科事典』(担当 宮田登 項目「八百比丘尼」平凡社、二〇一四年)。初版『世界大百科事典』(平凡社、一九五五年―一九五九年)。

また、九頭見和夫の一連の論考も参考となる。九頭見和夫「江戸時代以前の「人魚」像―日本における「人魚」像の原点へのアプローチ―」(『福島大学人間発達文化学類論集』二〇〇六年二月)、九頭見和夫「江戸時代の「人魚」像(2)―博物学の舶来を中心として―」(『福島大学人間発達文化学類論集』二〇〇六年六月等)。

(注一二) 『万葉集』一七四〇、一七四一番歌(おうふう、一九七二年)。

(注一三) 『浦島子伝』(新訂増補国史大系『古事談』)。重松明久『浦島子伝』(現代思潮新社、一九八一年。二〇〇六年再版)に拠る。

(注一四) 『浦島子伝』(『群書類従』)。重松明久『浦島子伝』(現代思

潮新社、一九八一年。二〇〇六年再版）に拠る。

（注一五）『続浦島子伝記』（『群書類従』）。重松明久『浦島子伝』（現代思潮新社、一九八一年。二〇〇六年再版）に拠る。

（注一六）『浦島の太郎』（『室町物語草子集』（新編日本古典文学全集』小学館）。

付、翻刻

凡例

一、舞鶴市糸井文庫蔵本を底本として翻字する。立命館大学アート・リサーチセンター「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」の画像データを基本的に使用する。必要に応じて、糸井文庫蔵本を直接確認する。

https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php

一、かな遣いは底本に拠り、適宜、濁点、句読点、半濁音、引用符、改行を補う。

一、ひらがな表記を適宜漢字に改める。

一、繰り返しを示す踊り字（く、ゝなど）は、それぞれ、もとの字に置き換える。

一、促音や拗音は細字で記す。

一、漢字の字体や送りがなは、現代の一般的な用法に近づける。

一、底本にふりがながある場合、原則としてルビとして記す。

【表紙】

ふるてづましなだまてばこ

古手妻品玉手筥 上

【1丁表】

かやうに候ものは、昔昔、龍宮へ参り、玉手箱を乙姫様に貰ひ候浦島

太郎にて候。誠に不思議なる玉手箱にて、この浦島太郎、誰人に会ふても、そちは若ひ若ひと褒めらるること年久しうござる。あまりに不思議はれぬことでござれば、そと玉手箱を開けてみやうと存ずる。おふかた（大方）宝がたんとあろう。宝があったことなら草双紙の種に致そうと存ず〔る〕。

じひぼう（慈悲坊）作者桜川慈悲成のこと、俺に箱を開けさせ、なんぞは恨みだぜ。

【1丁裏】 【2丁表】

浦島太郎は年久しく不思議に思ふ玉手箱なれば、どふも開けてみたくてならず、今朝開けてみよふか、晩に開けてみやうかと心がけていれども、かみ様は確かに化物でもでること心得、乙姫さんが開けるなと、かたがた言いなんした箱を開けなんすなと異見をする。太郎は、そふ言われるほど、なんだか急に開けてみたくなり、かみ様の留守に、そと玉手箱を開けてみれば、こはいかに、箱よりとふのいも（唐の芋）のふかしたてといふ湯気がぱつとたつと、たちまち浦島、よねのまもり（米の守り）でも出そふという老人にはまづなりにけり。けしからぬことだ。今さら開けて悔しきだ。

それ見なさい。それ開けなさんな開けなさんと言うに、人の言うことを聞かずに開けて、それまあ、おめでとふしなさる。

ばかりしくって涙も出ねえよ。

その顔を見な、寿老人のやうにならした。

これ、かかあ、堪忍してください。とんだものを開けて、こんな親父になって、貴様も定めて愛想が尽きるだらふ。

【2丁裏】 【3丁表】

何の開けずともいい箱を開けて、浦島、今さらにこふ年寄りになっては、かかあどんに言い訳がなひと、その昔、龍宮より太郎が乗って来た、亀は万年橋に世帯を持ち、不足なく暮らしている故、浦島、この亀が所へ行き、右の次第を話せば、年の功より亀の甲とやらで、そいつは何にしろとんだ話だが、そんならもふ一度龍宮へ行って、乙姫さんに嘆いてみなさんやしと、また我が背なに乗せて連れて行くぞ、とんだ世話焼き好きな亀じゃあねえかえ。

これ亀こうや、ぬしもそこをおつう（乙う）、太鼓を叩いてください。

もし旦那、今度は乙姫さんに、おまへ、いろみではさっぱり始まりやせんぜ。なんぶん若くしてもらひのまくとしなさんやし。

こうと明日は十日だな、金毘羅で物日か。金毘羅物日はそつちでせい、もしいいね。

【3丁裏】 【4丁表】

よふよふ龍の都に来たり、浦島、乙姫様に御目見へと願ひければ、昔

と違ひ、乙姫様も主ある御身なれども、昔馴染みの浦島がことと御目見へが叶ひ、何故この度は来たりしと御尋ねあれば、浦島は、開けるなど仰せありし玉手箱を開けたるあやまり、段々御詫びごと申し、何とぞ今一度若くなしてたび給へと、勝手次第の願ひ事に、乙姫様も、玉手箱の盛り替へとは、ちと練馬大根、太印とおぼしめしけれども、はるばるの所を来たりし心を感じ、人魚の御吸物にて御酒を下され、その上、また玉手箱を取らせ給ふ。

亀は、乙姫様もおふきに年増にならしやうと言ふ面で見ている。

ありがたひ、幸せでござります。

これこれ、ありがたいはいが、ござりますが悪ひ。まずは川魚じゃぞ。

昔のやうに乙姫様へ足をつけねえかと、蛸は蛸らしい洒落を言ふ。

おいらの子供の時分、来た人だの。

【4丁裏】 【5丁表】

かみ様への言い訳に浦島太郎は龍宮へ行き、人魚の御吸物を頂戴しければ、たちまち二十四、五の色男になりて、かみ様に見せふと早々帰りしが、浦島はちつとの間と思へども、はや五十年過ぎたれば、かみ様の頭は雪のやふになり、昔の景色はちつともなく、腰はへの字に、

齒は一本もなく、浦島この顔色を見て呆れ果てる。これは、誰でも呆れそうなもんだてな。

浦島は、かかあどんと言おおか、おふくろと言ををか、おばあさんと言おおかと、挨拶に当惑していれば、亀は、旦那、何でもおかみさんに違ひはござりやせんはな。胡乱ならまみへ（眉毛）に唾きでもつけてよく見なさりやし。

こちらのふと、帰らしやつたか。五十年が間、ふとにはたいてい、ふらふをはてなはったと、齒がなひゆへ、おつう（乙う）恨みを言ふ。

この人は冗談らしい。なぜそんな婆あの変似をするのだ。

俺がこんなことだろうと思つた。

こふ転ばねばならねえ。知れたことだ。

【5丁裏】

見れば見るほど亭主の若くなつたが、かみ様腹が立ちて、女房の言ふ。これおとこ、したにいや（下に言や）、いかに浦島だと言って釣竿のつりやわぬ（釣り合わぬ）ことしやるの。わしが婆あになれば、貴様、爺いになってくれてこそ嬉しひのに、をればっかりばうり（瓜）して、貴様、二才になつても、かいらし顔ばかりしてすむか。さあ今の間に爺いになるか、それとも俺を若くするか、二つに一つの返答

聞こふ。ここな爺い、二才の婆あ倒しめとせめ、馬の轡ぎはのやふに泡を吹いて小言を言う。

あやま針の療治、ねもじぐつとへいきさんだ。

家主は来たが、何とも言いやうがなひから、これはけしからぬことけしからぬこととばかり言って、根っから他の事を言わぬ。

【古手妻品玉手筥 下】

【表紙】

【1丁表】

かみ様は、浦島が持つて来たる人魚を探し出して、こそこそと若くなつて見せつけやうと、手料理にして、誰も叱り手はなし、をもうれ（思入）喰うぞ、乙りきなり。

隣の亭主、窓からこの様子をちらりと見たが、年の五つ、六つも若くなりけり。

初めて食ってみるが、これはとんだ旨ひ物だ。何杯も食へる。おもいれ食って若くなりましょう。

【1丁裏】 【2丁表】

不思議な事もあるもの、かみ様は人魚をしたたか食うて、二、三日経つと、十一、二の生娘となりしかば、とんだ可愛いらしくなつて、こいつは乙だと、浦島いろいろ痴話れども、なかなか色気も何にもなく、雛様事や何かばかり好きになり、太郎が言ふ事、根っから聞かねば、つまらぬものだ。

浦島言う、これ鼻あ、したにいや、いかに若くなるとても若くなりやうがありそふなものだ。俺はこの位な中男だに、貴様そんなあたけなひ娘になっていいか。それもいいが、そんなに綿屋の二階を見たやうに、つつんつんとしてくれることもねえ。まあどふするのだ。

放しなよ、お隣へ行つてままごとをするはな。

【2丁裏】 【3丁表】

浦島はかみ様が若くなつたで羨ましくなり、俺もまた若くなって、お染久松といふ若衆にならんと、こそこそと人魚を取り出し、煮て食ひけるが、今度は食ひ過ぎたと見へて、浦島、やふやふ五つ、六つの子供になれば、これはけしからぬと、近所の者来たり、よんどころなく浦島を、ここまでござれ、甘酒じよと浮かれてあやす。

とんだことがあればあるもんだ。かみ様が十三で亭主が七つ、呆れて物が言われねえ。

ここまでござれ、相談がござる。あんよは上手、この物前はどふだ。

このねんねえは大人しくなひ。ちって手を離れや。わしも談義詣りにでも出たひはと、しんが婆あだけ、つべこべつべこべと口をきく。

店賃がってんてんよ、借金乞ひはいやいや、かぶりかぶり、しほのめ、あたまてんてんのはいでもおやれ。

【3丁裏】 【4丁表】

子供遊芝居道行
こどもあそびしばいみちゆき

もはや九つ時、まんまの時分よ。そのまんまの時分には、ついている子はばっ子だ、意地汚なしと浮名立つ、浮名辰股、寅背中、二月二日や土用前、赤団子にはきなひが、後で何でも食わせると思ふ心のあればこそ、後の太夫殿のお顔の色も、先の大夫殿のお顔の色も虫氣の内藤八房の唐辛子、色々のよさ、父さん母さん幸せだ。

ツツツツツツツ、テテテンテン。

てんちきてんちき、すってんてんてんや、すってんてん。これから何にも言ふことがなひ、わひわひなひわい天王天玉様は、はやすがお好き、お好きさま、いくつ。十三、七つ。それで市が栄へた、ててんてんてん。

年は七つだが、飯はおや碗で三杯ぐらゐる食うそうで、とんだ太っている。

麦藁笠で出た所は、六阿弥陀へでも行くよふだ。

浦島さんや、あの姉さんは、どふも大人のやうなことを言うから、根っから面白くなひ。本卦返りの婆あ様、爺い様の所作、富十郎羽左衛門と見へます。

【4丁裏】 【5丁表】

万年橋亀右衛門、浦島夫婦にどふも世話が焼けてならず、丁度年頃い夫婦にしたく思へど、また玉手箱を開けさせたらば、爺い様婆あ様にならうし、そふ言つて子供では置かれず、どふ仕廻ひをつけやうと手こずり果てて、この本の作者の所へ来たり相談する。作者も工夫している所だ。亀右衛門、どうしやうと案じて、何でも浦島夫婦を大晦日に早く寝かして年を寄せ、元日、鶏のなかぬ内起こして若くし、その上、残りの人魚を玉手箱の湯気で蒸して食わせてみたら、中位な年恰好になりそうなのだと、いっぱしあんじのきで言うこともねえところだが、亀先生どふだね。

おまへが唐机によりかかりも、ちっとへどだね。

そうさ、そこがへどっ子で気が強ひのだ。

へどっ子もおかしひじゃあねえか。

【5丁裏】

人魚を玉手箱の湯気にて蒸して食わせければ、年も寄らず、そういつて子供にもならず、浦島夫婦、丁度良ひ釣合に、浦島二十五、六、かみ様二十二、三、花盛の夫婦仲、めでたひ春をそりや迎へけり迎へけり。

桃太郎大江山入 上中下 桜川慈悲成作 昔料理狸吸物 上下 同

作

内弁慶堪忍帳 上中下 同作 古手妻品玉手篋 上下 同

作

嫁入桐長持 上下 同作 豊国画（花押）

謝辞

資料掲載を許諾した舞鶴市へ謝意をあらわす。名古屋大学名誉教授の塩村耕氏へ謝意をあらわす。本研究はJSPS科研費JP 24K03643（日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「日本精神史の指標としての浦島伝説の解明」研究代表者 畑恵里子）、および、立命館大学アート・リサーチセンター国際共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」（研究設備・資産活用型）（研究代表者 畑恵里子）の成果の一部である。